

Title	21 世紀から見たパーマー（共同研究報告：英語教育研究）
Author(s)	小林, 雅博
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.18-No.2, 2008.9 : 22-23
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=4764
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

【英語教育研究】

21 世紀から見たパーマー

2008 年 6 月 16 日、総合研究所の 20 周年を記念する行事の一環として第 2 回英語教育研究会が開催され、23 名の参加者があった。今回は元玉川大学教授である伊村元道先生をお招きし、日本の英語教育の改革に尽力したハロルド・E・パーマーについての講演をお聞きして、今日に至る日本の英語教育の問題を考えた。

Harold E. Palmer (1877-1949) は、第一次大戦後ロンドン大学で外国語教授法を教えていた時に日本への招聘を受け、1922 (大正 11) 年に来日、文部省英語教授顧問となり、翌年英語教授研究所 (今の語学教育研究所の前身) を創立した。彼はそれまで訳読のみであった日本の英語教育界に、音声や英語で考えることを重視する Spoken English を導入し、またオーラル・メソッドに代表される新しい指導技術を広めるために東奔西走

した。1936 (昭和 11) 年に日本を去るまでの 14 年間、彼は一方では彼の方法に対する無理解や反発に遭い、また関東大震災から二・二六事件に至る日本の時代とともにあった。詳しくは伊村先生の著書『パーマーと日本の英語教育』(大修館書店、1997 年) を参照されたいが、このパーマーの日本におけるよき協力者であった石川林四郎 (東京高師教授) は、聖学院の創立者の一人である、石川角次郎の弟である。

次に伊村先生はパーマーの方法について、ご自身の経験も交えてお話をされた。その指導法の中心的技術である「英問英答」(Questions and Answers) は、やさしい英語と構文を使って素早い刺激と反応をくり返す訓練と言ってよいが、例えば「雪は白いか?」「白いか黒いか?」といった質問をすることには、あまりに無内容であるとか機械的であるといった反発があり、それまでの読本 (リーダー) を中心とする学校からはなかなか採用されなかった。そこで (石川林四郎のいた) 東京高師の付属中学校がパーマーの方法を実践する中心となり、後に伊村先生も東京教育大付属中学校で教えていた時には、新しい教材の内容を口頭で導入する Oral Introduction を毎日作るのに苦労したとのこと。またパーマーの方法には「教え込む」「たたき込む」といった厳しい側面もあり、了解から融合 (反復練習) へ、さらに総合活用へと進むにつれてたくさんの文型 (全部で 900) を覚えさせ、最終的にはどんな場面でも言えるようにするというのが、今日のいわゆるコミュニケーション方法と違う点である。しかし今日流行になっている方法の 3 分の 2 くらいはすでにパーマーがやっていたと述べ、彼が今日の英語教育の先駆者であったことを評価された。

質疑においては、パーマーの理論と今日の理論との違いについて、またパーマーの働きは結局実を結ばなかったのか、といった質問があり、また現役の教師からは、パーマーの方法が自分の英語教育法の中にいかに生きているかというコメントもあった。伊村先生も書いているように、日本の

英語教育は「70年たった今も事態は大して変わっていない」と思われるが、パーマーの先駆的な働きを今一度見直すべきことを思わされた。

(文責：小林雅博 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科 博士後期課程)

(2008年6月16日、聖学院生涯学習センター)